

九州大学文学部所蔵「敦煌文書」の来歴

坂上, 康俊

九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門日本史学 : 教授 : 奈良平安時代史

<https://doi.org/10.15017/3692>

出版情報 : 史淵. 141, pp.1-24, 2004-03-10. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

九州大学文学部所蔵「敦煌文書」の来歴

坂 上 康 俊

はじめに

九州大学文学部の所蔵資料の中に、「写経其他」として登録されている一群の文書がある。そのうちの一点、文書自体に「新大徳造窟簷計料」という題が付された二紙からなる文書は、石窟の前面に構築する簷のきの部材の寸法の書きあげであり、このことについて筆者は、敦煌研究院の馬徳氏の論文「九州大学文学部蔵敦煌文書「新大徳造窟簷計料」探微」の翻訳というかたちで、本誌第一三一輯（一九九四年三月）に紹介しておいた。

ただその際、当該文書がどのような経路をたどって本学部の所蔵に至ったのかという点については、殆ど手がかりが無いように思えたので、「図書室の記録によれば、この文書は一九四九年、田中三男氏より購入しているようであるが、それ以前の伝来経緯は不明である」と付記せざるをえなかった。ここで言う「図書室の記録」とは、後ほど関係部分を掲げる本学中央図書館保管の『昭和二十四年四至六月／図書受入命令（和）／182556—183702』（以下、『図書受入命令』と略す）及び『昭和二十四年度 付属図書館 歳出推算簿』のことである。既に半世紀も以前の購入品なので、請求書・納品書・見積書・古書価格認定書の類が全く残っておらず、また「田中三男」

という人名が、あまりにもありふれたものであったため、探索のよすがを得られなかったのであった。

ただ、当該文書は単品で購入されたわけではない。同時に五十九点の資料が一括して購入されていたのである。その一括購入品は、後に資料として掲げる『図書受入命令』の関係部分に見えるように、古銭蒐集家のコレクションのごとき様相を示している。しかも、そのコレクションの本来の持ち主は、昭和初期到北京にいた田中三郎という人物であるらしいことも推察できた。ただ、昭和初期の北京在住者を割り出すことの困難さは容易に想像でき、また「田中三郎」という人名も非常にありふれたものであったので、こちらからの探索も行き詰まりの観があった。しかし他に良い方法も思いつかないので、こういった手がかりを頼りに、幾つかの方面には問い合わせたことがあった。

そういった状態のまま、いたずらに時日を過ごしていたが、これ以上遷延すれば、本当に探索の手がかりを失ってしまうことをおそれ、二〇〇三年度前期の総合演習「歴史学の方法」の時間を利用して、学生諸君とともに当該文書について検討を加えることとした。そうしたところ、意外にあっさり田中三郎氏の経歴が判明したのである。しかもその田中三郎氏は、奇しくも時を前後して、京都国立博物館の赤尾栄慶氏が代表となり、三井文庫の清水実・樋口一貴両研究員が加わって実施された科学研究費補助金による調査『敦煌写本の書誌に関する調査研究』において、三井家が敦煌文書を購入する際に仲介した人物として、名のみ知られながら実像が詳らかでないこととされた田中三郎氏その人であることも判明した。そこで当該文書に縁の深い本誌において、いささか探索の結果と経緯を記そうと思う。

一 結 論

昨年六月に田中英樹氏と会見するより以前に判明していた田中三郎氏の経歴と、九州大学所蔵田中三郎コレク

シヨンの調査・研究の歴史を、年表風に示せば以下のようなになる。

大正^(一九二五)二四年三月

田中三郎氏、「広告／一銭范類／古刀布／古文銭／各国歴代銭／古泉書類／右永年支那在留の経験により珍品奇品を豊富に供給し得可き自信あり試に御注文を請ふ／北京南横街／普濟醫院／田中三郎／電話南局七百八十号」の広告を『貨幣』七二号に載せる。

大正^(一九二七)二四年一月

田中三郎氏、北京南横街普濟醫院にあり（東洋貨幣協会会員名簿、『貨幣』八〇号付録）。

昭和^(一九二七)二年頃

田中三郎氏、北京にあり（『呆仙追懷泉帖』）。

昭和六年一月二月

田中三郎氏、北京南横街普濟醫院にあり（東洋貨幣協会会員名簿、『貨幣』一五三号）。

昭和七年一月二月

田中三郎氏、福岡県筑紫村隈にあり（東洋貨幣協会会員名簿、『貨幣』一六五号）。

昭和二四年六月

田中三郎氏の嗣子（実際には三郎の兄市平の子）田中三男氏、田中三郎コレクションを九州大学文学部に売却。

昭和六〇年四月

坂上康俊、九州大学に着任、敦煌写経等を文学部書庫で見かける。

（その後、敦煌写経等は貴重書として図書室別室に移される）

昭和六二年一月

東京大学東洋文化研究所教授（当時）池田温氏、九州大学に集中講義で来校、敦煌文書を調査。

昭和六三年一〇月

坂上康俊、北京大学中国中古史研究センターで研修、榮新江・馬徳両氏に会う。

平成^(一九八九)元年八月

平成四年九月

池田温氏、国際敦煌吐魯番學術討論会（北京・房山）で、九州大学所蔵敦煌文書を紹介。

平成五年四月 馬徳氏、東京芸術大学に客員研究員として留学、同年七月、九州大学で原本調査。

平成五年八月 馬徳氏、雑誌『敦煌研究』一九九三年三期に論文を掲載。

平成五年一二月 馮継仁氏、雑誌『文物』一九九三年一二期に論文を掲載。

平成六年三月 坂上康俊、馬徳論文の翻訳を『史淵』一三一輯に掲載する。

同年中 『史淵』の抜刷を郵送して、藤枝晃、片山章雄、關尾史郎、梅村坦・恵子、田中淡等の諸氏に教示を求めらる。

平成八年六月 栄新江氏、著書『海外敦煌吐魯番文献見録』（江西人民出版社）で、九州大学文学部所蔵敦煌文書を紹介。

平成八年一二月 馬徳氏、著書『敦煌莫高窟史研究』（甘肅教育出版社）で、九州大学文学部所蔵敦煌文書を紹介。

平成九年三月 東野治之氏より、東洋貨幣協会会員名簿の大正一四年版に、田中三郎の名があることを示さる。（田中三郎氏は当時北京南横街普濟医院にいたことが判明する）

平成一五年三月 赤尾栄慶研究代表科学研究費補助金報告書『敦煌写本の書誌に関する調査研究』刊行。仲介者として田中三郎を紹介。

平成一五年四月 坂上康俊、九州大学文学部の授業・総合演習「歴史学の方法」で、田中三郎コレクションを取り上げる。

六月 坂上康俊等、田中三男氏の長男田中英樹氏と会見。

ここで、田中英樹氏の談話と戸籍の記載とを総合して、九大所蔵敦煌文書の由来に関係する限りでの田中三郎・

三男両氏の略歴をあらためて記せば、以下のようになる。

田中三郎氏は明治二〇（一九八七）年八月福岡県の生まれで、高等小学校を卒業後、殆ど身一つの丁稚奉公のような形で、博多港から大連（？）に渡った。その後氏は、商才を発揮してかなりの資産をつくり、それをもつて北京の南横街（戸籍では宣武門外南横街一四六号）に、普濟医院を開設した。もちろん自らは医師ではなかった。日本人の医師を数名雇ったところ、中国人の貴紳の間にも好評を得て、莫大な財をなした。そこで、もともとあった古銭・絵画・書のコレクターとしての一面を活かして、三井財閥の番頭等ともつきあいが生じたらしい（田中英樹氏の談によれば「祖父は三井の番頭とも骨董のことでいろいろつきあいがあつたようだけれど、現在はその関係の資料は全く残っていない」という）。後述するように、これが現在三井文庫にある敦煌写経の購入仲介の件と結びつく。

大正五（一九一六）年一月、普濟医院の婦長だった星野ヨシ（芳子とも、明治一七年、栃木県生まれ）と結婚したが、昭和四（一九二九）年一月に夫人に先立たれ、昭和七年に帰国、故郷の筑紫村で田畑を購入して広大な邸宅「向陽庵」を営み、昭和九年八月一〇日に死去した。子供が無かつたので、いろいろ経緯はあつたが、結局は兄市平の四男である三男氏（大正七年三月生まれ、平成四年死去）が、三郎氏の財産を引き継いだ。三男氏の長男に当たる英樹氏（昭和一三年生まれ）の話では、金庫にぎっしり詰まっていた満鉄の株券で紙飛行機を作つて遊んだこともあつたという。終戦後、農地改革等で窮迫した三男氏は、それまで置いてあつた三郎氏のコレクションを殆ど売り払つたが、その一部を昭和二四年に九州大学文学部が購入したのである。今、英樹氏の自宅には、楊守敬の書（写真1）と、三郎氏の北京の邸宅（病院を兼ねていた）にも掲げてあつた中村不折の書（写真2）のみが残っている。また、数は少ないが、三郎氏の写真も数葉残されている（後掲）。

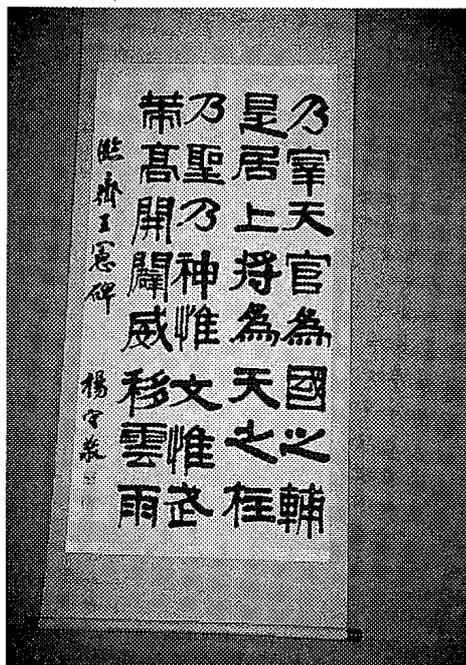


写真1 楊守敬の書

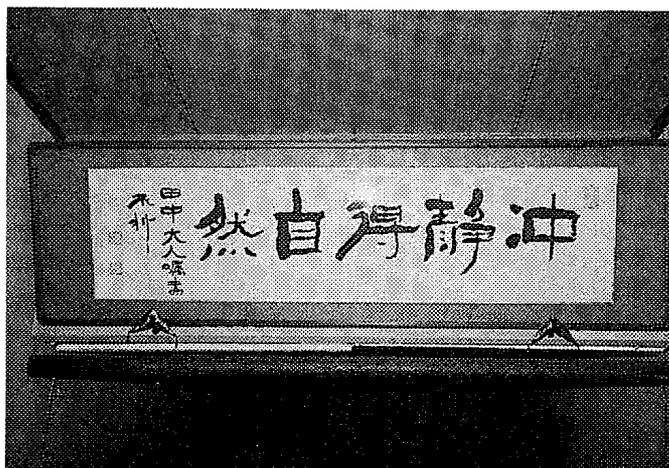


写真2 中村不折の書

二 田中三郎コレクション

既に結論が記されているので、蛇足、それも非常に長大な蛇足にはなるが、それを承知の上で、結論に至るまでの探索の経緯を記録しておこう。

当該文書に関して最初に手許にあった資料は、先述した九州大学中央図書館の『昭和二十四年度 附属図書館 歳出推算簿』と『図書受入命令』であった。これらはともに、当時文学部の図書掛長であった田島秀晃氏の御高配で、コピーを手に入れることができたものである。前者にはその128番に「錢幣館 銷夏撮摸帳 一部外五八点」と記され、債主の欄に「田中三男」とある。債主の欄には他にどういいうものが並んでいるかと思えば、丸善・積分館・金文堂といった書店もあれば、第一法規のような出版社もあり、また田中三男以外にも高柳長三・四宮種美・八木英蔵といった個人名もある。そうした中で「積文館 八木英蔵」という記入法もあるので、田中三男は個人として売却したのか、書店の代表者なのか判然としないのである。そこで後述するように、古書籍商の田中姓のものに当たってみるといふ企てが一案として浮上したのであった。

一方後者、すなわち『図書受入命令』には、供給人を田中三男とし、昭和二四年六月七日を請求の日付とする（現品の領収は六月一〇日となっている）一括購入の図書一点一点の図書番号・書名・部数・冊数・単価・代価・摘要（登録ないし配架先）・現品領収の日付・印という項目について記入されている。この『図書受入命令』は、今後の叙述に便利なので、関係部分をそのまま次頁以下に資料として掲げておく（資料1）。

内容の一事については触れないが、一見して骨董・拓本・古銭に関係するものが大半であることが分かる。しかし、かなりポピュラーなもの、あるいはハンドブック的なものも混じっていて、雑然とした印象を持たざるを得ない。これらのうち、敦煌文物との関係で注目を集めそうなのは、183324番の「大方等大集経 抄写 一部一巻」、183325番の「浄妙経開注疏（言うまでもなく「浄妙経関中疏」の誤りである） 卷上写 一部一巻」、183326番の「写経其他 一部五冊」の三点であり、最後の「写経其他」の中に「新大徳造窟簷計料」が含まれていた。「五冊」というのは、従って厳密な表現ではない。一種の端本の扱いということになるだろうか。

幸運にもこれらの一括購入物は、九州大学文学部の書庫にそのままの順序で架蔵されていたので（現在では、右の三点が、貴重書として図書室に別置されている）、それらをめくれば、このコレクションの性格が分かるはずである。そこで検討してみたところ、183280番には「大正十五年十一月 中村不折手拓」とあり、「不折手拓」の印が捺されていた。ついで183285番は、大正一五（一九二六）年に作成された銭譜であるが、これには、「松平写真館」云々のキャプションを付した口絵があり、また「北京の田中三郎様（折しも入京中で）の御遠来の方々を始めとし」云々とも記されていた。このうち前者については、183305番にある「東京牛込松平」のスタンプ（ローマ字）、あるいは183293番に登場する松平勇、また183322番に含まれる一葉に書かれた「惟伯文友 松平記」との関係が推測され、後者は、本稿の主人公の動向を示しているということになる。なお183322番は、元来アルバム仕立てになっていたもので、もともと「北京 岩田秀則」の写真館アルバムであった様子が窺える。こういった

資料 1

物品 受入 命令				圖書 請求 書				圖書出納簿記入 印
支出科目	物品出納命令印	物品會計官吏印	主長印	請求取扱者印	年	月	日	
圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	現品價收 月日印	供給 人 田 中 三 男
183271	錢幣館(館更)捐募帳	1	7	30.00	210.00	支那哲學史	濟	
183272	古器物範圍錄	1	1		100.00		濟	
183273	司南藏瘞鶴銘兩程合冊	1	1		50.00		濟	
183274	薛少保信行禪師碑	1	1		50.00		濟	
183275	唐搨九成宮醴泉銘	1	1		50.00		濟	

日本標準規格 A3 横三線 (140×297)

19.11-2.080 (第 128 號)

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	現品價收 月日印
183276	最初拓禮器碑及碑陰	1	1		50.00	支那哲學史	濟
183277	西嶽華山廟碑	1	1		80.00		濟
183278	楊齋珍藏金石拓片	1	1		100.00		濟
183279	古泉匯	1	20	20.00	400.00		濟
183280	歷代古泉百二十五譜	1	1		80.00		濟
183281	明治新撰泉譜一至三集	1	3	65.00	195.00		濟
183282	校碑通暉	1	2	100.00	200.00		濟

日本標準規格 A3 横三線 (140×297)

20.4-3.000

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	現品價收 月日印
183283	吉金所見錄	1	4	50.00	200.00	支那哲學史	濟
183284	漢劉熊碑	1	1		50.00		濟
183285	宋仙遊懷泉帖	1	1		100.00		濟
183286	衆仙嗣輯	1	1		80.00		濟
183287	新疆禮俗志; 新疆小正	1	1		80.00		濟
183288	新疆訪古錄	1	1		50.00		濟
183289	漢西嶽華山廟碑	1	1		80.00		濟

日本標準規格 A3 横三線 (140×297)

20.4-3.000

九州大学文学部所蔵「敦煌文書」の来歴

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購品價目表 月日印
183290	宋拓夏承碑	/	/		100.00	支那哲學史	濟
183291	漢鄧陽令曹全碑	/	/		100.00		濟
183292	樂雨古化雜詠	/	2	100.00	200.00		濟
183293	紹治堂林翁隱退紀念泉講	/	/		100.00		濟
183294	西嶽華山廟碑(宋拓)	/	/		100.00		濟
183295	禮器碑	/	/		20.00		濟
183296	楹書偶錄	/	4	40.00	160.00		濟

日本標準規格 A3 横三竪 (140x297)

204-3,000

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購品價目表 月日印
183297	辛丑銷夏記	/	/		50.00	支那哲學史	濟
183298	貨幣沿革圖錄	/	/		20.00		濟
183299	古泉雜誌	/	/		100.00		濟
183300	東洋錢貨年表	/	/		20.00		濟
183301	九州古泉會誌	/	2	75.00	150.00		濟
183302	古錢の語	/	/		20.00		濟
183303	寛永錢記	/	/		20.00		濟

日本標準規格 A3 横三竪 (140x297)

204-3,000

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購品價目表 月日印
183304	雙泉齋賞	/	/		20.00	支那哲學史	濟
183305	和漢稀世泉講 乾坤	/	2	50.00	100.00		濟
183306	鑄貨圖錄 乾	/	/		50.00		濟
183307	大正古錢價格圖鑑	/	/		30.00		濟
183308	朝鮮錢史 乾	/	/		20.00		濟
183309	昭和泉譜	/	/		20.00		濟
183310	古錢價格表	/	/		20.00		濟

日本標準規格 A3 横三竪 (140x297)

204-3,000

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購置 月日	印
183311	貿易銀論評集	1	1		10.00	支那哲學史	濟	
183312	日鮮通貨年表	1	1		10.00		濟	
183313	大同石佛寫真集	1	5	50.00	250.00	美術史	濟	
183314	佛像首寫真	1	1		150.00		濟	
183315	貨幣 1至185	1	168	1.50	252.00	支那哲學史	濟	
183316	古觀 1至13	1	11	1.00	78.00		濟	
183317	鑿泉 10至35	1	20	7.50	150.00		濟	

日本標準規格 A3 横三線 (140x297)

204-3008

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購置 月日	印
183318	東京古泉協會雜誌 112至127	1	16	10.00	160.00	支那哲學史	濟	
183319	筑紫化蝶會拓模集 14号	1	1		20.00		濟	
183320	古錢 9卷1号	1	1		10.00		濟	
183321	大日本國室古金銀教奇者見立	1	枚		10.00		濟	
183322	佛像爵譽寫真	1	43	2.00	86.00		濟	
183323	硯史摹本	1	1		200.00		濟	
183324	大才等大集經 抄寫	1	1		300.00		濟	

日本標準規格 A3 横三線 (140x297)

204-3008

圖書番號	書名	部數	冊數	單價	代價	摘要	購置 月日	印
183325	淨名經用中疏 卷上寫	1	巻		150.00	支那哲學史	濟	
183326	寫經其他	1	5	30.00	150.00		濟	
183327	古金文拓本	1	1		100.00		濟	
183328	鐘鼎文字	1	2	50.00	100.00		濟	
183329	肉筆書簡	1	1		100.00		濟	
	計		59	356	6,180.00			

日本標準規格 A3 横三線 (140x297)

204-3008

状況の中で最も決定的だったのは、昭和二（一九二七）年七月に作成された錢譜である183293番で、この末尾には「總計壹百冊之内 田中三郎殿」との贈記があった。

ここまでの調査から筋を作るとすれば、大正末年から昭和初年にかけて北京に在住した田中三郎なる古銭マニアのコレクションが、昭和二四年になって、なぜか田中三男という別人の手により九州大学に売却された、という事になり、その田中三郎は、東京牛込の松平勇という写真家、北京の岩田秀則という写真館主人、また画家・書家として著名な中村不折とは交友があった可能性がある、ということになるだろう。もちろん人事興信録あるいは日本紳士録といった類の文献も、当該期についてできるだけ当たってみたが、田中三郎・三男両名ともに同姓同名が多く、しかもこのコレクションとの結びつきを感じさせるような事例を見出すことはできなかった。

馬徳氏の論文を翻訳して紹介したとき筆者に分かっていたのはここまでであったが、田中三郎の方は、いわば二次的な推測に初めて登場するため、より確実な田中三男の旧蔵であることに注意を促しつつ、問い合わせの趣旨を添えて、情報を得られそうな人々若干に抜刷を送付した。たいていの場合は田中三男という人物には心当たりが無いという返答しかいただけなかったが、その中であって、斯界の第一人者、藤枝晃氏から耳寄りな情報を含む以下のようなお返事を頂いた（一九九四年六月一九日付け。原文横書き）。

敬覆 貴信並に同封の「史淵」一三二号抜刷の馬徳君著貴識論文、及び貴大学蔵「新大徳造窟簷計料」文書写真を数日前に拝受しました。有難く御礼申し上げます。

去る三月に馬徳君が京都へ来たとき、福岡へ行って貴学御所蔵の文書・写経類を拝見して来たとは申してましたが、時間が短くて詳しい話は聞きませんでした。その直後に「文物」誌昨年一二期が着いて、文書の実体を知ることができ、この様な文書が日本に流れてきてゐたことに驚いてゐました。三十余年以前に日野先生や岡崎敬先生のお招きで、福岡に参上した節は、スタイン蒐集の写真がはいったばかりの時で、その様な

実物はなく、どこから来たものかと首をかしげただけでした。

いま貴信によつて、田中三男氏旧蔵と知りました。これは御本人乃至家族から購入せられたのでせうか、それとも仲介の業者あたりが、旧所蔵者名を洩らしたのでせうか。或は所蔵印でも押してあるのか、その辺をお知らせ頂ければ幸甚です。

田中といふ姓の人は実に多く、三男といふ名も少くはなく、恐らく同名の人はたくさん存在すると思ひますが、小生の知合ひで、同姓同名の外交官がゐりました。たしか兵庫県の人、戦後ニューヨーク総領事を勤め、帰国後なくなりました。この人は終戦時に天津総領事を勤めてゐて、その時私は蒙疆地区より天津に脱出した難民の一人で、総領事館が難民の世話をしてゐたので、田中氏とも往来がありました。天津総領事であれば、この種のもの入手する機会も恐らくあつたことと思はれます。

田中三男氏は三〇年ばかり前になくなり、その後も交際のあつた館員諸氏もあらかたなくなりましたが、当時の書記生で、その後大使などを勤めた人が、一人まだ東京で存命の筈ですから、問合せをしてみたいと思ひます。それに就いては、前段で申した様なこと、もう少し詳しくお知らせ下さい。

明日は、龍谷大学の西域研究会の定例集会日なので、抜刷と写真とを出席者に紹介したいと思ひます。

また足腰の立つ間に、機会を得れば、実物を拝見に参上致したいものと思つてます。

先は御礼旁々お願ひまで。

こうして、終戦直後に天津にあつた外交官田中三男氏が、当該コレクションの九州大学への売却者候補として急浮上したのである。しかし、この推測はまもなくしてあえなくも潰れてしまった。なぜならば、筆者が北京大留学中に知り合つた外務省の石塚英樹氏に、たまたま氏が一通りではない古銭マニアであつたこともあつて、外交官田中三男氏のことを調査していただいたところ、以下のような返答を得たからである（七月七日付け）。

一、外交官名簿（明治二十七年第一回試験以来）を繙いたところ、タナカミツオなる人物は、昭和七年合格の田中三男・元大使だけである（因みに、田中三郎なる者は無し）。

二、昭和七年合格の田中三男・元大使の略歴は以下の通りで、大正末期、昭和初期に北京に居たことを示す直接的な証拠はありませんでした。

明治四〇年十一月、兵庫県出身。

昭和七年、高等文官試験外交科合格

昭和八年、東京帝国大学法学部卒業

.....

昭和一五年、上海領事

昭和一八年、北京領事

昭和一九年、天津領事

を経て、戦後、入管、サンフランシスコ所長、情報文化局長を歴任の上、

昭和三二年、ニューヨーク総領事

昭和三六年、チリ大使

昭和三八年、アルゼンチン大使

昭和四二年、トルコ大使（一四五年）

三、外務省に長く奉職している古銭蒐集家（昭和三八年入省）に当たってみたところ、田中三男・元大使が古銭を蒐集していたという事実は知らない、という証言有り。また「田中三郎」なる古銭蒐集家がいたかどうか、及び紹治堂、呆仙については、現在数名の大家に照会中です。

四、先生の御下問「外交官田中三男は大正末期中国に居たか」という問いについては、愚考するに、田中三男・元大使（昭和七年入省）と大正末期に活動していた錢譜中の「田中三郎」とは同一人物とは考えがたい、と思われまゝす。

石塚氏の綿密な調査に対して筆者は、「（上略）おかげで外交官田中三男氏が、田中三郎なる名で（ないしそう誤られて）古錢蒐集を行っていたという可能性は無くなったように思います。従つて今後は、大正末・昭和初期に北京にいた田中三郎氏と、昭和二四年に九大に古書を売却した田中三男氏とをあらためて検討せねばならぬなりました。前者については紳士録の類で若干怪しげな者もおりますし（詰められないのは、前述の如く紳士録類に欠号の多いため）、また後者については、田中姓の古書店主をリストアップしてもらつておりますので、そのうちに何か判りましたら、あらためてお知らせ致します」という返事を出し（七月二二日付け）、一方藤枝晃氏に對しても、以下のように調査状況を報告した（七月一三日付け）。

（上略）さつそくですが、九大文学部蔵敦煌文書の伝来経路につき、現在までに調査したところをお知らせします。

一、田中三男という名の外交官は、先生お知合いの方一名のみのようで、外務省在勤の友人の調査結果は別紙の通りであります。九大等で手軽に見ることのできる人事興信録・紳士録類でも、略同様で、趣味はゴルフ・庭球と見え、また昭和二四年にコレクションを売却しなければならぬような事情は、特に読みとれませんでした。

二、九大法学部・文学部の卒業生名簿には、田中三男という名は見えない。また、田中三郎という名も無い。

三、田中三男コレクションの中には、その旧蔵者が、昭和の初期に北京に居た古錢収集家の田中三郎であつ

た徴証があること、別添の資料の通り。この人物については、この付近の人事録類が不備なこともあり、現在古銭収集家の線と併行して調査中。

四、先日お送りした資料に見える供給人という立場は、個人のこともあり、古書店主のこともあるとのこと。小生思文閣出版の社長が田中姓ということから、同社に問合わせるところ、三男ではなく、また先代も異なるとの報あり。現在、古書店主中の田中姓の者を同社員の好意に甘えてリストアップしてもらっています。

五、九大図書館・同本部の会計課等には、約半世紀も昔のこととて、納品書・古書見積り書等は残っていないとのこと。

六、九大の中国哲学の先生方（含、退官者）に二、三うかがったのですが、「関西方面だったように思う」との漠然たる記憶ぐらしか手掛りは得られませんでした。

おおよそ右のような状況でありまして、今後は昭和初期に北京にいた田中三郎と、昭和二四年に九大に売却した田中三男（両者は親子関係かもしれませんが）の両方を追求していかうと考えております。また何かわかりましたら、お知らせ致します。

ここでいう思文閣出版の社員というのは、馬場正彦氏（現在、吉川弘文館）のことで、馬場氏からは、全国古書籍商組合連合会発行の「全連会員名簿 一九九一」の中で、田中姓の店主が記載されている箇所をコピーして送っていただいたのであった。それを頼りに福岡近辺及び関西方面若干に問い合わせの電話を入れてみたが、はかばかしい進展は見られなかった。右の手紙に対する藤枝氏の返事（一九九五年二月六日付け）も、前回同様に掲げることにする。

拝啓 長らく御無沙汰致しましたが、御健勝のことと存じます。

昨夏以来貴学の田中コレクションに関して次々と関係書類をお送り頂きましたが、一向に返事も差上げず、失礼の段おゆるし下さい。小生昨秋以来、血圧不調にて仕事の手につかず、また先月中旬以来インフルエンザにて再度臥床致し、連絡が遅れました。

この件につき昨秋に、終戦時に北京大使館付書記生であった浅田泰三氏に問合せました（同氏はその後方々の大使を勤めて退官）。そしたら一月中旬になって同氏が京都へ来て、会ってこのことを話しました。

前便で、田中氏が天津総領事と申したのは私の間違ひで、当時は北京大使館付の領事で、蒙疆引揚の難民の世話のために天津に駐在してゐたとのことでした（そのため小生と接触があつた次第です）。二人で話し合ひましたが、田中三男氏がその様な蒐集に関心をもつてゐた形跡はなく、きつと別人だらうといふことになりました。そして書類をよく見返しましたら、貴学へ売込んだのは田中三男ではなく、田中三郎とありました。いよいよ別人の様です。

今さら手遅れの様な報告ですが、以上お知らせ申し上げます。

田中三男と田中三郎という大変よく似た、かつあまりにもありふれた名前のせいで混乱も見られるが、藤枝氏も懸命に調査されていたことが窺える。生前の氏に、今回のような報告を届けられなかったことを、心から悔やむ次第である。

三 南横街普濟医院

以上の経緯で、初期の探索はいわば暗礁に乗り上げたような格好になってしまった。もちろん機会あるごとに近代史関係の研究者に尋ねたりし、その中には、埼玉大学の中村尚史氏（現在、東京大学）から寄せられた、日本銀行関係者の田中三郎といった、一瞬色めき立つような情報もあったが、全くの別人と判明するといった具合

で、調査は頓挫していたのである。

こういった状況に転機をもたらしたのは東野治之氏から寄せられた情報である。たまたま氏から『貨幣の日本史』（朝日選書、一九九七年）の惠与を受けたのを機に、礼状がてら古銭蒐集家としての田中三郎について御存知の事はないか、とのおうかがいを立てた。早速いただいた返事（一九九七年三月二四日付け）には、以下のように思いがけない情報が記されていたのである。

（上略）さて、おたずねの田中三郎氏ですが、同封の名簿に名があり、北京で開業していた医師ではないかと思えます。この協会は、大正昭和期日本で最も有力な同好会であったようで、「貨幣」という雑誌の発行主体でした。これが近年復刻されたとき別冊が付いて、そこに瓜生有伸という人が、銘々伝のようなものをまとめていますので、あわせて該当部分を同封します。この伝記には田中三郎の名がありませんので、それほど有名人ではなかったとみてよいのではないのでしょうか。名簿の方は、以前「貨幣」をめくっていたとき、林若樹、山中笑、三村清三郎、北浦大介（定政の子）などの名前があるのが楽しく、コピーしておいたもの、「貨幣」別冊は古書市でバラで入手したものの、いずれもこういうことでお役にたてて喜んでいきます。「貨幣」をたんねんにひっくりかえせばなお田中三郎氏の情報をもう少しさぐり出せるかも知れませんが、とりあえず手近かでわかるところをお知らせ致します。（下略）

同封されていた「貨幣第八十号附録／大正十四年十一月一日現在／東洋貨幣協会々員名簿」の一部のコピーには、その特別会員の項に「支那北京南横街普濟醫院 菟泉堂 田中三郎」の名があった。東野氏の書簡の中の「貨幣」をたんねんにひっくりかえせば「云々を直ちに実行に移していれば、もう少し早く結論に到達しえたのであるが、それは後知恵というものである。一つには雑誌『貨幣』が田中三郎・三男コレクションに入っていることを失念してしまっており、また名簿には「附録」と記されていたため、『貨幣』そのものに会員名簿が載っている

とは思わず、今ひとつ熱意が沸かなかったことも原因であるが、むしろ「北京南横街普濟医院」という居所に眼が眩んだことが、直ちに『貨幣』へと向かわなかつた主因であつた。早速九州大学大学資料室の折田悦郎助教授を煩わし、九大医学部の卒業生名簿に当たつていただいたが、該当者はいなかつた。戦前の北京の病院というのは、雲をつかむような話で、余計な筋を考えなくともよいという意味では多少絞られてきたが、依然として暗中模索と言つてよい状態であつた。

そうする内に二〇〇三年度前期の授業で総合演習を担当することとなり、これが最後の機会ということで、一つには田中三郎・三男の調査、一つには当該文書自体の内容・形態にかかわる調査という二つを柱にして学生諸君に分担してもらい、それぞれ報告をしてもらった。その中で「古銭から見た田中三郎」という項目を担当した上原利恵・松葉祐輝・鈴木克の三君（ともに考古学専攻）が、コレクションの中にあつた『貨幣』バックナンバーの一五三号に掲載されていた「東洋貨幣協会会員名簿」（昭和六年一月）に、菟泉楼・田中三郎氏が依然として北京南横街普濟医院にあることを見出したのみならず、同一六五号の「東洋貨幣協会会員名簿」（昭和七年一月）では、向陽庵・田中三郎氏が福岡県筑紫村隈にあることを見出したのである。六月二日にその報告を受けて地図で調べてみると、「筑紫村隈」とは、現在の筑紫野市大字隈に当たることがわかつたので、早速筑紫野市教育委員会の渡辺和子氏に心当たりが無いかを問い合わせたところ、その日の内に田中三男氏の長男、田中英樹氏にたどり着くことができたのであつた。田中英樹氏は現在、（株）太陽設計という会社を經營しておられるが、その本社は九州大学旧教養部、現在の比較社会文化研究院等が立地する六本松キャンパスから歩いて五分という所だつたのには驚いた。たまたま都合の付かなかつた松葉君を除く二人とともに田中英樹氏を訪問したのは、二〇〇三年六月六日のことであつた。その際の聞き取りとその後の戸籍調査を踏まえて記したのが、先に記した「結論」である。

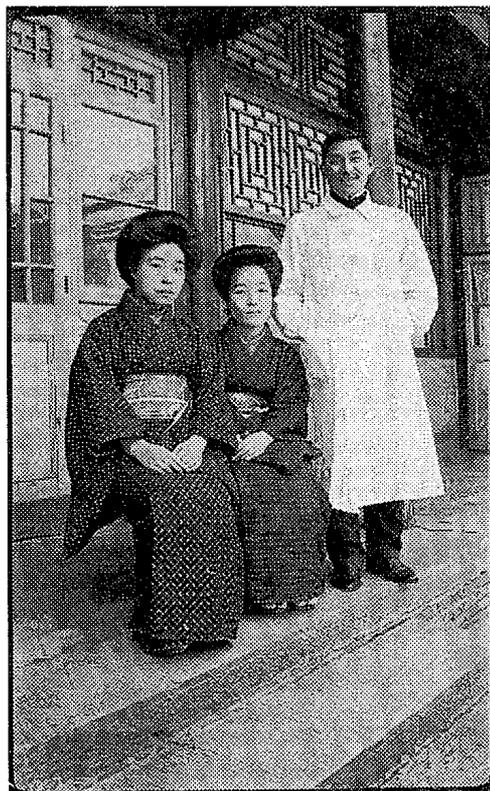


写真4
医師に扮する田中三郎氏とヨシ夫人（中央）普済医院にて

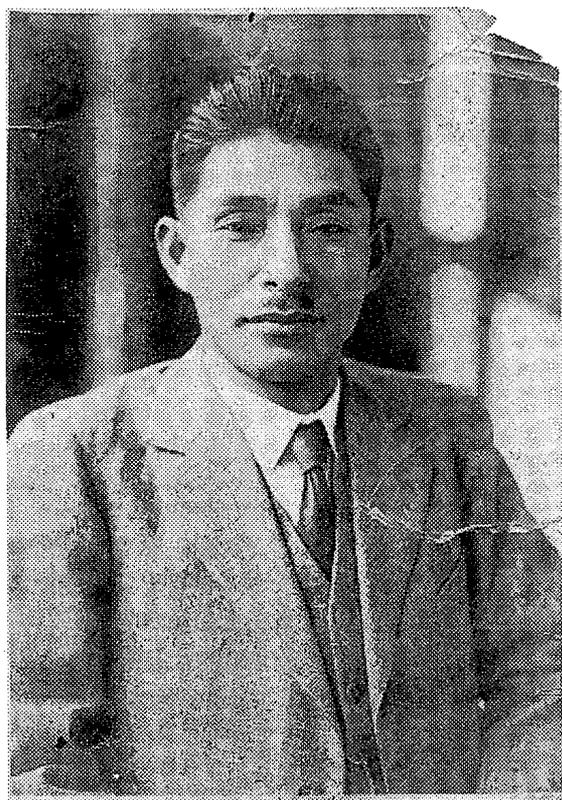


写真3
田中三郎氏（50歳前後）



写真6
前列左より ヨシ、早苗（三郎の兄市平の三男）、秀雄（市平の五男）、三郎の各氏

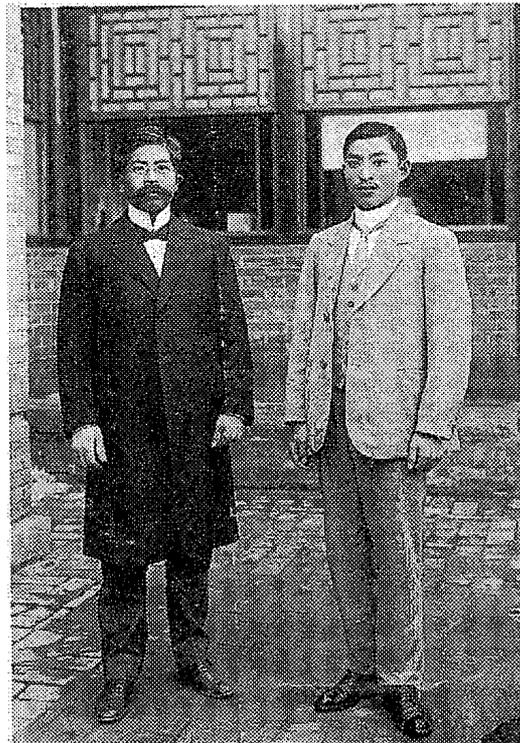


写真5
田中三郎氏（右）と日本人の病院長（姓名不詳）普済医院にて

なお南横街は、侯仁之主編『北京歴史地図集』（北京出版社、一九八八年）の「民国北京城（一九一七年）」などを見ると、宣武門から宣武門大街を南に二キロ弱進んだところを東西に走る通りで、東進すれば城南公園（旧先農壇）に突き当たる。現在もその街路の名は残っている。ただ、戸籍では、その一四六号が住居（兼普濟医院）とされているが、手許の王彬主編『實用北京街巷指南』（北京燕山出版社、一九八七年）を見ても、同一の番地を見いだせなかった。これはいずれ近い将来に確認しようと思う。写真に見えるような普濟医院の痕跡が、残っていないとは限らないからである。

四 三井家と田中三郎

田中三郎氏の経歴判明の旨を池田温先生に報告したところ、赤尾栄慶氏が研究代表となった科学研究費補助金報告書『敦煌写本の書誌に関する調査研究』の中に、田中三郎氏から三井家が入手した敦煌写巻のことが見えてくるむね連絡があつた。早速赤尾氏にお願いし、科研の報告書を送っていただいたが、三井文庫で調査に当たられた氏も吃驚された様子であつた。その後一月一二日に機会を得て上京し、三井文庫で田中三郎関係の資料を閲覧した。以下にその成果を記す。

現在三井文庫において把握されている田中三郎氏の足跡は、前掲科研の報告書で写真とともに紹介されている、昭和三年六月と一一月の二度にわたって敦煌写経を三井家に売却した際の書き上げである「北三井家所蔵 敦煌発掘古写経目録」の他に、以下のようなものがある。

1 宋拓・李思訓碑購入一件関係書簡。いずれも村木北水（三井家執事）宛。

① 大正一四年七月一二日付け書簡（一葉）、封筒残存せず。

*この間、同七月一八日付け村木北水より田中三郎宛の返信ありか（残存せず）。

②大正一四年八月四日付け書簡（二葉）、交渉経過の通知、封筒残存せず。

③大正一四年九月三日付け書簡（二葉）、鉄道小包で送付したことの通知。

封筒表「東京市小石川区水道町／三十五番地三井家御表／村木北水様」

封筒裏「支那北京南横街／田中三郎／九月三日」（写真7）

④大正一四年一〇月四日付け書簡（一葉）、購入代金・天津往復旅費受領の件。

封筒表「東京市小石川区水道町／三十五番地三井家御表／村木北水様」

封筒裏「支那北京南横街／田中三郎／十月四日」

2 北宋拓・聖教序購入一件関係領収書。

（ただし、やや混乱があるようで、田中三郎関係としては、次の二点が残されているものの、後者については拓本そのものは現存しない）

①昭和三年二月付け、邵松年より田中三郎宛の「北宋拓王右軍聖教序一部／北宋拓皇甫君碑一部」の代価八〇〇〇元の領収書。

②戊辰年（昭和三年）九月一三日付け、魏正清より「田中先生」宛の「唐拓聖教序」の代価五五〇〇元の領収書。

3 宋拓・孔子廟堂碑購入関係領収書。（うち田中三郎が関係しているのは次の二点）

①昭和四年一月一日付け、沈瑞臣より「田中先生」宛の「宋拓陝本廟堂碑」の代価一一〇〇〇元の領収書（写真8）

②同日付け、田中三郎より三井物産株式会社北京出張員宛の「新町様御買物代」一二〇〇〇円の領収書

以上は、新町三井家の当主であった高堅が、几帳面に保存していた購入関係資料の一部として、それぞれの拓

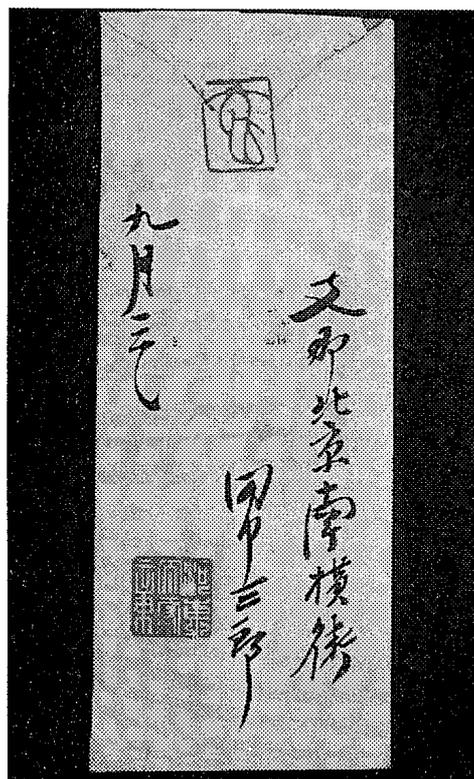


写真7

本の納められた箱に入れられている。これらの資料から、田中三郎氏は大正一四年から昭和四年にかけて新町三井家の拓本蒐集の際に、北京ないしその近傍で拓本購入の仲介の役割を果たしていたことが判明する。

この他にも、三井文庫の資料によれば、田中三郎氏は古代中国の貨幣である郢爰四四枚を、昭和四年六月と昭和六年三月の二度にわたって三井家に譲渡していることが知られる。その間のいきさつについて同資料は、田中氏は古銭家としてもまた支那考古品の探求家としても知られた人だが、氏の古銭の知識は、三井鉱山会社に五十年勤めていた瀬尾外与蔵（号、向陵亭。文久三―昭和二）との親交の中で培われたもので、その関係から三井高堅の知遇を蒙ったことが、古銭の譲渡に繋がったらしいとしている。この貨幣は田中三郎氏が昭和三年ころ地方探訪にかけた際、河南省で見つかったものを手に入れたらしいので、田中三郎氏は、北京・天津ばかりでなく諸処に探索の網を張っていたことが判明する。この中であって三井文庫蔵敦煌写経は、中国甘肅督軍を務めた張広建の旧蔵にかかり、その一部が一九二四年に北京・

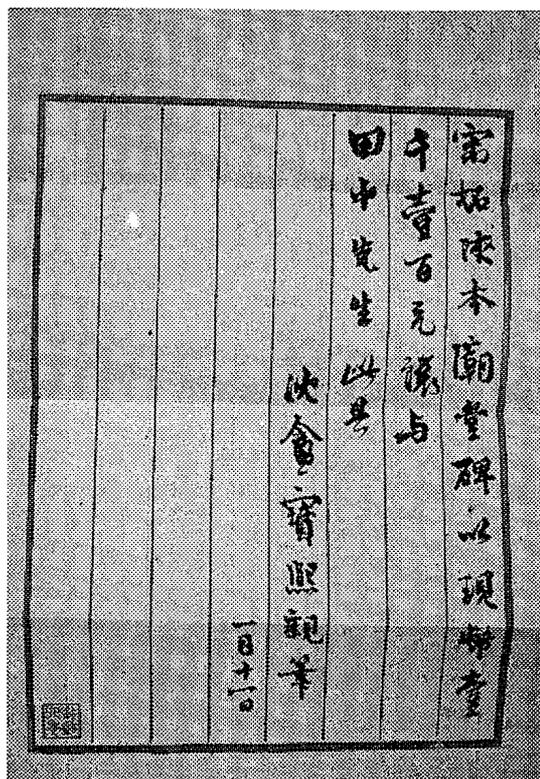


写真8

宣武門外の江西会館で開催された展覧会に出品されているという(前掲科研報告書ii頁)。そうだとすれば、この展覧会は、田中三郎氏の自宅兼病院に程近いところで開かれたことになり、敦煌写経は、ごく近所で購入したということになるう。

おわりに

以上が、九州大学文学部所蔵「敦煌文書」の来歴について、現段階で判明したことである。九州大学の「敦煌文書」は、単品で銭関係のコレクションに混じっていたはずはないから、ひよつとすると旧所蔵者のもとに、未だ世に知られていない敦煌関係文物が所蔵されているかもしれないと考えたことはあった。残念ながら田中三郎氏の子孫のほうには、敦煌関係文物はもちろん、日記、書簡、帳簿等の、北京での「敦煌文書」購入経緯を窺い知ることのできる資料は残されていなかった。しかし、意外にも三井文庫所蔵敦煌写経の購入仲介者と同一人物が、一旦手にした物であったことがわかり、購入のルートについても、従来よりは遙かに絞られてきた。しかし、結局九州大学所蔵文書そのものを、いつ、どのようにして田中三郎氏が手に入れたのか、それは分からずじまいとなった。二紙で今は分離している文書、しかも内容的にかなり特殊な文書が、単品で保存され、また蔵経洞発見後に単品で北京付近まで流れてきたというのはやや考えにくい。いずれかの経巻に付随して購入されたのではないか、紙の上下にある破損の形状から何とかそのあたりを調べられないか、など、妄想ばかりが膨らむ。しかも、そもそもこの文書自体には、敦煌のものという明証はないし、また年次も記されていない。馬徳氏や馮繼仁氏による、文書の内容・字形からの推測とは別に、コディコロジーの手法を駆使して時期や場所を限定できないか、とも考える。当該文書ばかりでなく、コレクションの中には、なお数点の写巻があり、これらの調査や、更には保存処理も残された課題である。

昭和初期の北京、その宣武門外の南横街で、どんな暮らしをしていたのか、残された写真から田中三郎氏の人となり、そしてその悲喜に思いを馳せつつ、ひとまず拙い報告を終えよう。

〔付記〕成稿に当たっては、本文中にその名を掲げた方々のほか、九州大学文学部図書掛の原田紀子・芦北卓也両氏のお世話になった。記して謝意を表します。

なお、三井文庫別館では、二〇〇四年一月一七日～二月二日、「シルクロードの至宝 敦煌写経」展を催した。その時作成された図録『敦煌写経―北三井家―』（三井文庫、二〇〇四年一月）に収められた清水実・樋口一貴「三井文庫所蔵敦煌写経の伝来と調査の経緯」四七～八頁に、田中三郎の購入仲介の件が紹介されているので、あわせ参照していただければ幸いです。